

判別分析

基本的な考え方

村田 昇

講義の内容

- 第 1 日 : 判別分析の考え方
- 第 2 日 : 分析の評価

判別分析の考え方

判別分析

- 判別分析 (**discriminant analysis**) の目的
個体の特徴量からその個体の属する **クラス** を予測する関係式を構成する方法
- 関係式 : **判別関数** (discriminant function)
 - 説明変数 : $X = (X_1, \dots, X_q)$
 - 目的変数 : Y ($K (\geq 2)$ 個のクラスラベル)
- 判別関数による分類
 - 1 次式の場合 : **線形判別分析** (linear discriminant analysis)
 - 2 次式の場合 : **2 次判別分析** (quadratic discriminant analysis)

判別分析の例

- 検査結果から患者が病気を罹患しているか判定する
 - X = 検査結果
 - Y = 病気・健康
- 今日の経済指標から明日株価を予測する
 - X = 今日の経済指標
 - Y = 明日株価の上昇・下降
- 今日の大気の状態から, 明日の天気を予測する
 - X = 今日の大気の状態
 - Y = 晴・くもり・雨・雪

判別分析の考え方

- 確率による定式化
 1. $X = \mathbf{x}$ の下で $Y = k$ となる **条件付確率** を計算

$$p_k(\mathbf{x}) = P(Y = k | X = \mathbf{x})$$

2. 所属する確率が最も高いクラスに個体を分類

- 観測データ: n 個の (Y, X_1, \dots, X_q) の組

$$\{(y_i, x_{i1}, \dots, x_{iq})\}_{i=1}^n$$

- 観測データから Y の条件付確率 $p_k(\mathbf{x})$ を構成

条件付確率

- 以下では X は離散型の q 次元確率変数として説明
- 事象 $X = \mathbf{x}$ が起きたという条件の下で事象 $Y = k$ が起きる条件付確率

$$p_k(\mathbf{x}) = P(Y = k | X = \mathbf{x}) = \frac{P(Y = k, X = \mathbf{x})}{P(X = \mathbf{x})}$$

- 連続な確率変数の場合は確率密度関数を用いる

条件付確率の表現

- Y の条件付確率 $p_k(\mathbf{x})$ のモデル化の方針
 - $p_k(\mathbf{x})$ を直接モデル化する (例: ロジスティック回帰)
 - $Y = k$ の下での X の条件付き確率質量関数

$$f_k(\mathbf{x}) = P(X = \mathbf{x} | Y = k) = \frac{P(X = \mathbf{x}, Y = k)}{P(Y = k)}$$

のモデル化を通じて $p_k(\mathbf{x})$ をモデル化する

- 本講義では 後者 について説明

演習

問題

- 以下の問に答えなさい
 - X, Y を離散確率変数とすると、 $P(X = \mathbf{x} | Y = k)$ から $P(Y = k | X = \mathbf{x})$ を計算する式を導け

事後確率による判別

Bayes の公式

- $f_k(\mathbf{x})$ から $p_k(\mathbf{x})$ を得る数学的原理
原因 $X = \mathbf{x}$ から結果 $Y = k$ が生じる確率を結果 $Y = k$ が生じた原因が $X = \mathbf{x}$ である確率から計算する方法
- Bayes の公式 (Bayes' formula)

$$p_k(\mathbf{x}) = P(Y = k | X = \mathbf{x}) = \frac{f_k(\mathbf{x})P(Y = k)}{\sum_{l=1}^K f_l(\mathbf{x})P(Y = l)}$$

Bayes の公式の略証

- 定義より

$$f_k(\mathbf{x}) = P(X = \mathbf{x} | Y = k) = \frac{P(X = \mathbf{x}, Y = k)}{P(Y = k)}$$

- 求める条件付確率

$$p_k(\mathbf{x}) = P(Y = k | X = \mathbf{x}) = \frac{f_k(\mathbf{x})P(Y = k)}{P(X = \mathbf{x})}$$

- 分母の展開

$$\begin{aligned} P(X = \mathbf{x}) &= \sum_{l=1}^k P(X = \mathbf{x}, Y = l) \\ &= \sum_{l=1}^k f_l(\mathbf{x})P(Y = l) \end{aligned}$$

事前確率と事後確率

- **事前確率**: $\pi_k = P(Y = k)$ (prior probability)
 - $X = \mathbf{x}$ が与えられる前に予測されるクラス確率
- **事後確率**: $p_k(\mathbf{x})$ (posterior probability)
 - $X = \mathbf{x}$ が与えられた後に予測されるクラス確率
- Bayes の公式による書き換え:

$$p_k(\mathbf{x}) = \frac{f_k(\mathbf{x})\pi_k}{\sum_{l=1}^k f_l(\mathbf{x})\pi_l} = \frac{f_k(\mathbf{x})}{\sum_{l=1}^k f_l(\mathbf{x})\pi_l} \cdot \pi_k$$

- 事前確率が説明変数の条件付確率の重みで変更される

事前確率の決め方

- 事前に特別な情報がない場合
データから自然に決まる確率

$$\pi_k = \frac{Y = k \text{ のサンプル数}}{\text{全サンプル数}}$$

- 事前に情報がある場合

食事・運動・飲酒・ストレスなどの生活の特徴から生活習慣病か否かを判別

- 健常者の食事・運動・飲酒・ストレスなどの特徴量を収集
- 罹患者の食事・運動・飲酒・ストレスなどの特徴量を収集
- 事前確率は **別の調査の日本人の罹患率** を利用

線形判別分析

判別関数

- 判別の手続き
 - 説明変数 $X = \mathbf{x}$ の取得
 - 事後確率 $p_k(\mathbf{x})$ の計算
 - 事後確率最大のクラスにデータを分類
- 判別関数: $\delta_k(\mathbf{x})$ ($k = 1, \dots, K$)

$$p_k(\mathbf{x}) < p_l(\mathbf{x}) \Leftrightarrow \delta_k(\mathbf{x}) < \delta_l(\mathbf{x})$$

- 事後確率の順序を保存する計算しやすい関数

- 判別関数 $\delta_k(\mathbf{x})$ を最大化するクラス k に分類

線形判別

- $f_k(\mathbf{x})$ の仮定
 - q 変量正規分布の密度関数
 - 平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}_k$: クラスごとに異なる
 - 共分散行列 Σ : すべてのクラスで共通

$$f_k(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^{q/2} \sqrt{\det \Sigma}} \exp \left(-\frac{1}{2} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}_k)^\top \Sigma^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}_k) \right)$$

- 線形判別関数: \mathbf{x} の 1 次式

$$\delta_k(\mathbf{x}) = \mathbf{x}^\top \Sigma^{-1} \boldsymbol{\mu}_k - \frac{1}{2} \boldsymbol{\mu}_k^\top \Sigma^{-1} \boldsymbol{\mu}_k + \log \pi_k$$

平均・分散の推定

- 平均の推定 (クラスごとに行う)

$$\hat{\boldsymbol{\mu}}_k = \frac{1}{n_k} \sum_{i: y_i = k} \mathbf{x}_i$$

- ただし n_k は $y_i = k$ であるようなデータの総数

- 分散の推定 (まとめて行う)

$$\hat{\Sigma} = \frac{1}{n-K} \sum_{k=1}^K \sum_{i: y_i = k} (\mathbf{x}_i - \hat{\boldsymbol{\mu}}_k)(\mathbf{x}_i - \hat{\boldsymbol{\mu}}_k)^\top$$

演習

問題

- 以下の問に答えなさい
 - X の条件付確率 $f_k(\mathbf{x})$ に関する仮定
 - * q 変量正規分布の密度関数
 - * 平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}_k$: クラスごとに異なる
 - * 共分散行列 Σ : すべてのクラスで共通
- のもとで事後確率と線形判別関数の同値性

$$p_k(\mathbf{x}) < p_l(\mathbf{x}) \Leftrightarrow \delta_k(\mathbf{x}) < \delta_l(\mathbf{x})$$

を示しなさい

2次判別分析

2次判別

- $f_k(\mathbf{x})$ の仮定
 - q 変量正規分布の密度関数
 - 平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}_k$: クラスごとに異なる
 - 共分散行列 Σ_k : **クラスごとに異なる**

$$f_k(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^{q/2} \sqrt{\det \Sigma_k}} \exp \left(-\frac{1}{2} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}_k)^\top \Sigma_k^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}_k) \right)$$

- 2次判別関数: \mathbf{x} の2次式

$$\delta_k(\mathbf{x}) = -\frac{1}{2} \log \det \Sigma_k - \frac{1}{2} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}_k)^\top \Sigma_k^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu}_k) + \log \pi_k$$

平均・分散の推定

- 平均の推定 (クラスごとに行う)

$$\hat{\boldsymbol{\mu}}_k = \frac{1}{n_k} \sum_{i: y_i=k} \mathbf{x}_i$$

- ただし n_k は $y_i = k$ であるようなデータの総数

- 分散の推定 (クラスごとに行う)

$$\hat{\Sigma}_k = \frac{1}{n_k - 1} \sum_{i: y_i=k} (\mathbf{x}_i - \hat{\boldsymbol{\mu}}_k)(\mathbf{x}_i - \hat{\boldsymbol{\mu}}_k)^\top$$

演習

問題

- 以下の問に答えなさい
 - X の条件付確率 $f_k(\mathbf{x})$ に関する仮定
 - * q 変量正規分布の密度関数
 - * 平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}_k$: クラスごとに異なる
 - * 共分散行列 Σ_k : クラスごとに異なる
 - のもとで事後確率と 2 次判別関数の同値性

$$p_k(\mathbf{x}) < p_l(\mathbf{x}) \Leftrightarrow \delta_k(\mathbf{x}) < \delta_l(\mathbf{x})$$

を示しなさい

多値判別

多値判別の構成方法

- 判別関数の比較
 - 判別関数 δ_k を比較
 - 正規分布を仮定する場合は一般には 2 次判別
- 2 値判別の統合
 - 2 クラスでの比較: 最大の組合せ数 ${}_KC_2$
 - グループでの比較: 最大の組合せ数 $2^K - 2$
- $K-1$ 個の特徴量への変換
 - 説明変数の線形結合による特徴量の構成
 - **Fisher の線形判別**

変動の分解

- 3 種類の変動
 - $A = \sum_{i=1}^n (\mathbf{x}_i - \boldsymbol{\mu})(\mathbf{x}_i - \boldsymbol{\mu})^\top$: 全変動
 - $W = \sum_{i=1}^n (\mathbf{x}_i - \boldsymbol{\mu}_{y_i})(\mathbf{x}_i - \boldsymbol{\mu}_{y_i})^\top$: 群内変動
 - $B = \sum_{k=1}^K n_k (\boldsymbol{\mu}_k - \boldsymbol{\mu})(\boldsymbol{\mu}_k - \boldsymbol{\mu})^\top$: 群間変動
(n_k はクラス k のデータ数)
- 変動の関係

$$(\text{全変動}) = (\text{群内変動}) + (\text{群間変動})$$

$$A = W + B$$

演習

問題

- 以下の問に答えなさい
 - 全変動が群内・群間変動に分解されることを示しなさい
 - 説明変数の線形結合で新たな特徴量を構成する

$$Z = \alpha^T X$$

このとき Z の群内変動と群間変動を求めなさい

Fisher の判別分析

Fisher の線形判別

- 判別のための特徴量 $Z = \alpha^T X$
- 良い Z の基準
 - クラス内では集まっているほど良い ($\alpha^T W \alpha$ は小)
 - クラス間では離れているほど良い ($\alpha^T B \alpha$ は大)
- Fisher の基準

$$\text{maximize } \alpha^T B \alpha \quad \text{s.t.} \quad \alpha^T W \alpha = \text{const.}$$

クラス内変動を一定にしてクラス間変動を最大化する

Fisher の線形判別の解

- α は $W^{-1}B$ の固有値 (主成分分析の導出と同様)
 - $K = 2$ の場合: 最大固有値を用いる (線形判別と一致)

$$\alpha \propto W^{-1}(\mu_1 - \mu_2)$$

- 一般の K の場合: 第 1 から第 $K-1$ 固有値を用いる
- 判別の手続き
 - 特徴量とクラスを中心までの距離を用いる
 1. $d_k = \sum_{l=1}^{K-1} (\alpha_l^T x - \alpha_l^T \mu_k)^2$ を計算
 2. 最小の d_k となるクラス k に判別

解析の事例

データについて

- 気象庁より取得した東京の気候データ
 - 気象庁 <https://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/obsdl/index.php>
 - データ https://noboru-murata.github.io/multivariate-analysis/data/tokyo_weather.csv

気温と湿度による月の判別

- 10,11 月のデータの散布図

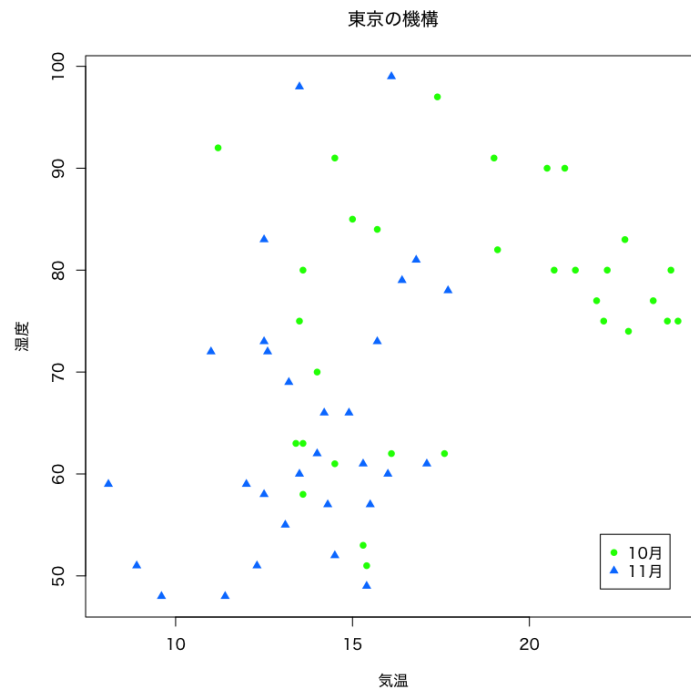


図 1: 散布図

- 線形判別 (2 値)
- 2 次判別 (2 値)
- Fisher の線形判別 (多値)

次週の予定

- 第 1 日 : 判別分析の考え方
- 第 2 日 : 分析の評価

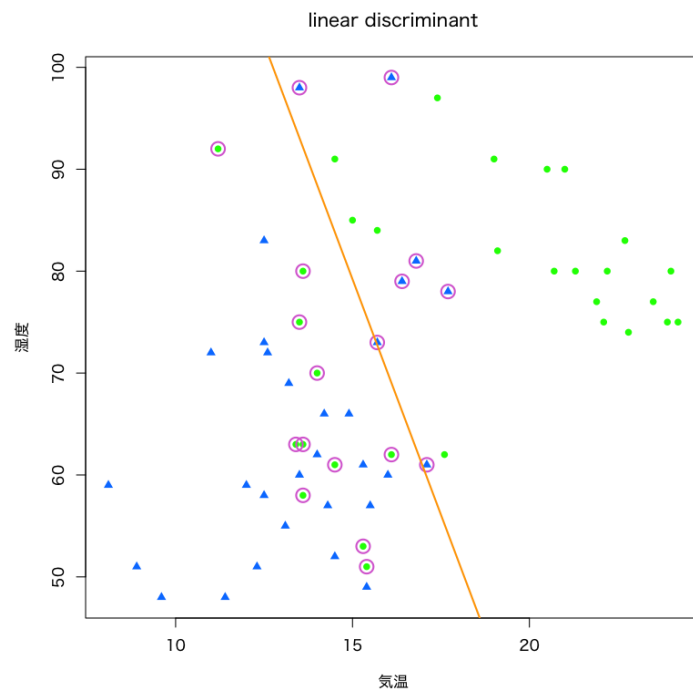


図 2: 線形判別 (○は判別誤り)

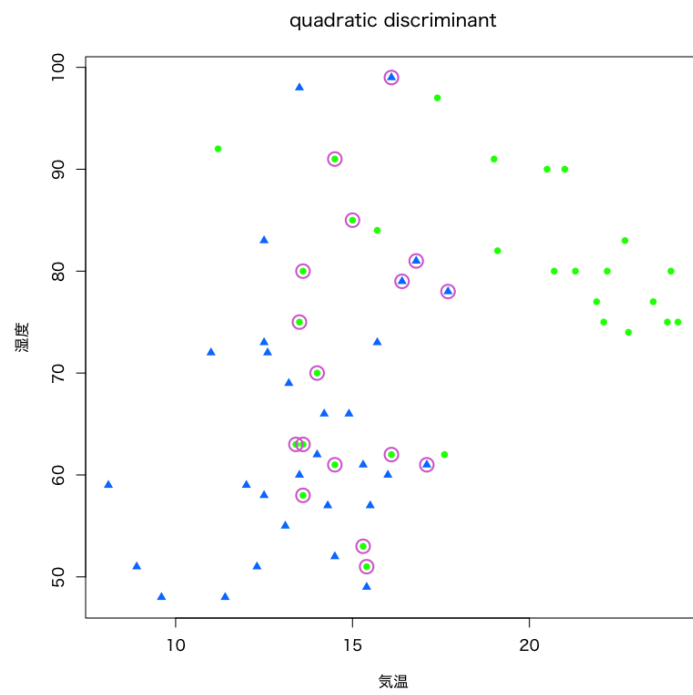


図 3: 2 次判別

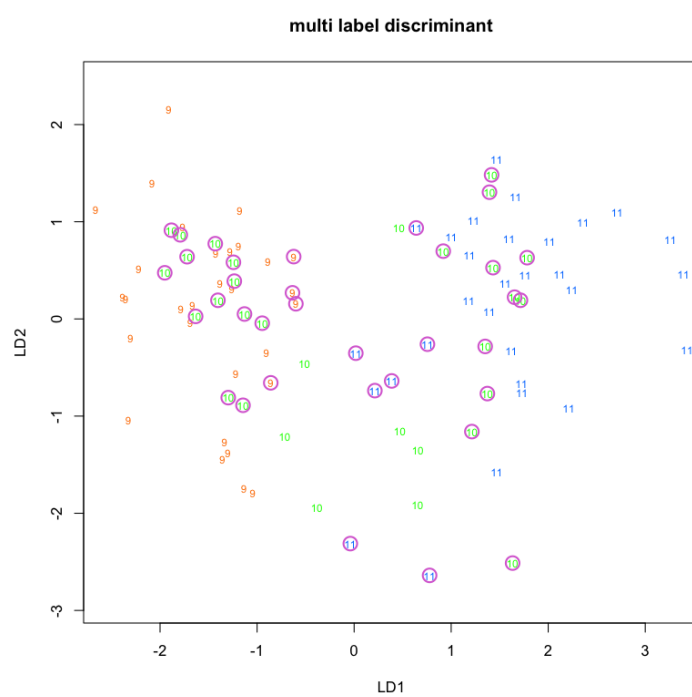


图 4: 多值判别